

古代都市ダルヴェルジン・テパ遺跡出土の新資料

加藤 九 祚 ・ B. トウルグノフ

はじめに

碩学故 G. A. プガチェンコワ博士の創設した「ウズベキスタン芸術学調査団」（ウズベキスタン共和国科学アカデミー芸術学研究所附置、以下、芸術学調査団という。）は 1960 年に古代バクトリア遺跡の調査を開始し、今日に至るまでその調査研究を継続している。

ダルヴェルジン・テパはウズベキスタン共和国スルハンダリア州の州都テルメズ市から北へ 120 キロメートルにある。シュルチ地区に位置するこの古代遺址は、中央アジアで最大級のクシヤン朝時代の考古学遺跡の一つに数えられる（図1）。

それは、クシヤン朝の上層部及び守備隊が居住していた可能性のある面積 5 ヘクタールの城塞址「上の都市ツィタデル」と、都市の富裕層、商人、陶工、仏教徒、そして手工業職人が居住していた面積約 42 ヘクタールの長方形の「下の都市シャフリスタン」の二部分からなる。都市全体は全長 2.5 キロメートルの城壁に囲まれていた。城壁の厚さは 9～10 メートルあり、壁の外側は幅 15～20 メートルの水で満ちた濠があった（図2）。都市の門の位置は「下の都市」の南東部の起伏が「上の都市」の防壁との接触点で、明らかに下方に傾斜していることで判断できる。この一画では「上の都市」に向かって上り坂になるように長く傾斜している様子が確認される（図1参照）。

城壁は、内部に回廊と牢獄を備えた櫓があり、その頂上部には投石兵と投石器のための台があった。

ダルヴェルジン・テパ都城址から出土した見事な遺物は広く知られている。例えば、重さ約 36kg の黄金宝室や二つの仏教寺院址から出土した 40 体以上の塑像及び石膏像等があり、さらにインド産象牙製将棋駒は世界最古級品とみなされ、今日でも学术界から注目されている（図3）。

都市の裕福な市民の邸宅（18室と26室）の建築物もその壮大さが際立ち、都市から 70～80 キロメートルのバイスタウ山脈から運び込んだ石材を、コリント式柱礎や木柱の上に据える柱頭にして築いている。芸術学調査団によるダルヴェルジン・テパ遺跡調査に関わる上記の成果はすべて 1967 年から 2014 年までに実施された 35 箇所が発掘区において発見された。これらは全てウズベキスタンや外国で出版された論文、モノグラフ、図録、雑誌、新聞の多くの媒体で発表されている。

¹ 本稿は、加藤九祚先生（本シルクロード研究センター初代センター長）が 2016 年 3 月から 5 月にかけてダルヴェルジン・テパ遺跡において実施された発掘調査の概報である。本報告は 2016 年 9 月 15 日にサマルカンドで行われた発掘調査報告会において加藤先生ご自身が発表の予定であった。しかし、同年 9 月 11 日にテルメズの地で急逝されたため、ウズベク側発掘責任者のトゥルグノフ氏が報告をされた。ここに両先生による発掘報告（ロシア語原稿）を、日本語に翻訳し掲載させていただく。なお、本稿の執筆に際し、田辺勝美博士、D.ルサノフ氏、T.ウミッド氏の御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

私たちはここで、新たに設けた発掘区における成果について紹介を行う。すなわち、2015年と2016年の春（3月から4月）に筆者らが行ったDT-32発掘区およびDT-37発掘区の調査成果である。

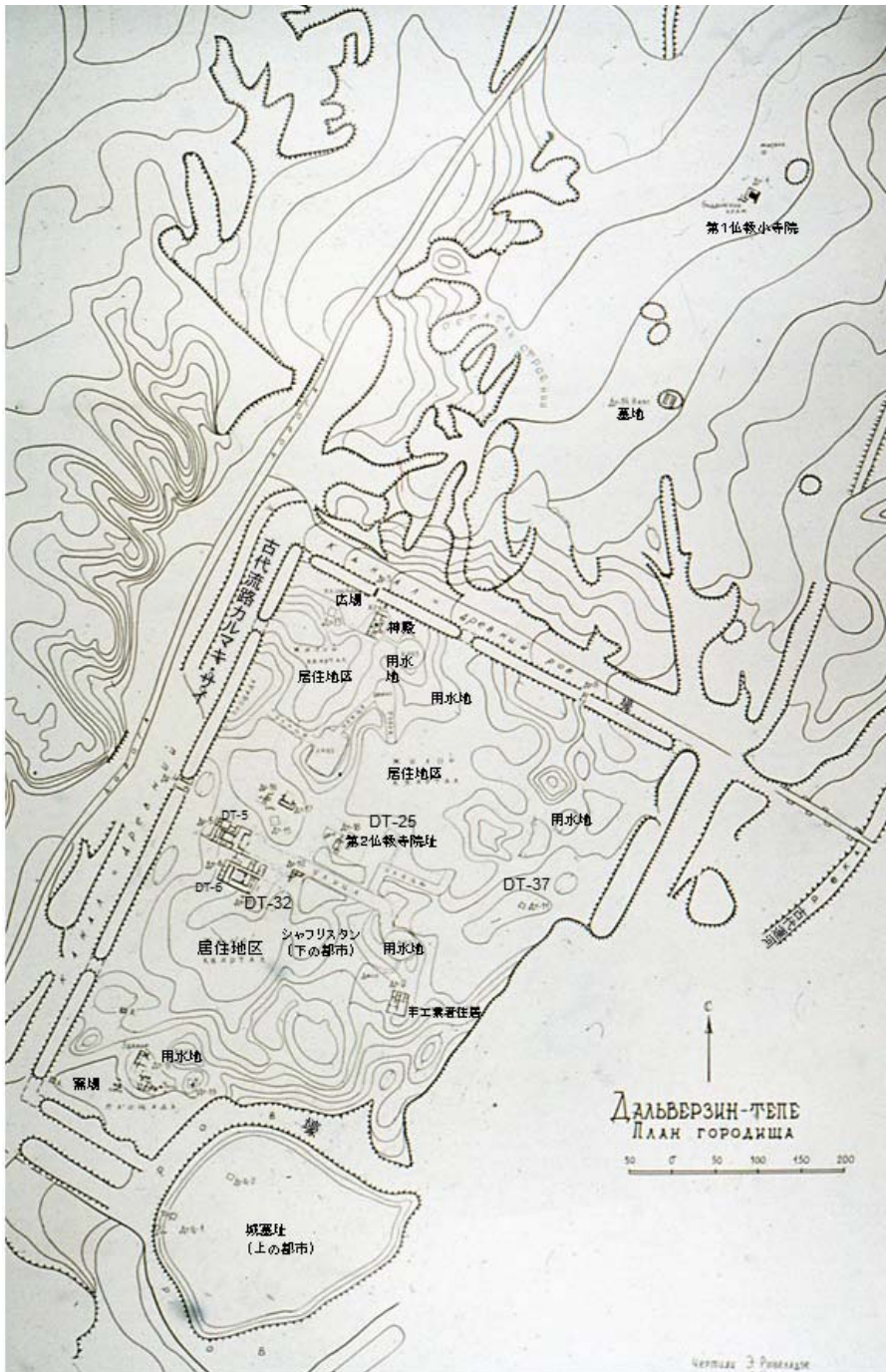


図1 ダルヴェルジン・テパ平面図



図 2 城壁と濠



図 3 DT-5 出土 将棋の駒

DT-32 発掘区

DT-32 発掘区の地下 1 メートルの深さで粘土壁を検出した。続いて、1.5 メートルの深さで白色漆喰の塗布された壁を検出した。さらに掘り進めると、深さ 3 メートルの地点で状態の良い平滑された部屋の床面を検出した。発掘区を拡張していくと、床面に、メルゲリウス石灰岩を素材としたアッティカ式柱礎 (図 4) が出土した。類似の柱礎を私たちは DT-5 と DT-6 の邸宅の発掘で発見したが、それらは大型や巨大な規模の柱礎であった。同様の柱礎は、私たちが 1960 年代に行ったハルチャヤン遺跡、また 2012～2014 年に加藤が行ったカラバグテパ遺跡の発掘で多数発見されている (図 5)。このような建築品の素材は、私たちの発掘地点から 70～80 キロメートル離れたパイスタウ山脈で採石された。数日後、同じ場所の部屋の床上で、二つ目の柱礎を検出したが、最初の柱礎と同形のものであった。



図 4 DT-32 出土柱礎



図 5 ハルチャヤン、カラバグテパ遺跡

この部屋は完全に発掘することができた。その結果、遺構は10×6メートルの中央広間をもつ、周囲に様々なサイズの部屋と幅広の長い廊下が配置された屋敷であることがわかった。発掘初年度に5室を、その後、同じ年にさらに5室を発掘した(図6)。

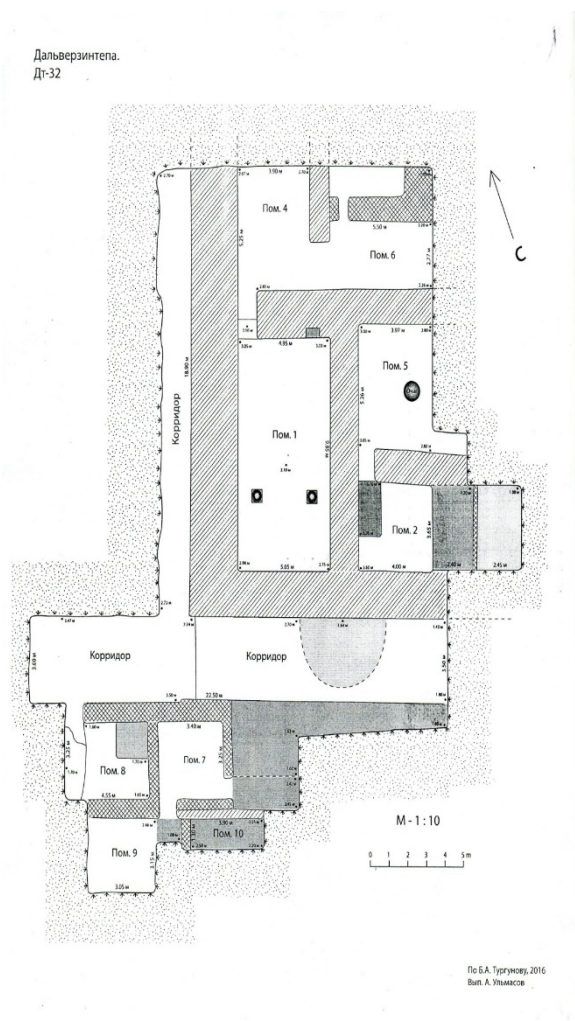


図6 DT-32 発掘区平面図

これらの遺構は、DT-32 発掘区が明らかに裕福な市民の大邸宅に属し、ギリシア・ローマ様式の巨大な柱礎や重さ約36キログラムの黄金遺宝、世界最古級の象牙製将棋駒が発見された大邸宅(DT-5, 6)に類似の屋敷であることを示している。

これらの部屋からの出土品は多種多様である。

これら遺物は主に広間の廻りに配置された1号室（広間）、2号室、そして5号室で発見された。この中には、女性像テラコッタ（22点）、クシヤン朝国王発行の銅貨（68点）、女性達が衣服の糸を紡ぐために利用した紡錘車、骨製女性用装身具、ガラス、貴石、ダルヴェルジン・テパの窯で製作された多様な形状と容量の土器、石製アカンサス、小型金製装飾品（図7）がある。

全ての発掘品の中で、銅製燭台は最も注目される一つである（図8）。職人はそれを屋敷の主のために特別に1点ものとして製作したようである。普通、私たちはただの粘土や、土器、石、あるいは鉄で作られた燭台をよく目にするが、本作品は素材の点でもユニークである。私たちの発見した作品は銅で作られており、しかも興味深い形状を呈している。二つの角をもつ鹿が表現され、火を灯すための円形の燭台がしっかりと固定されている。それは直径8.8センチメートルの円形を呈し、火皿は直径4.8センチメートル、深さ1.4センチメートルである。後脚と尾は欠損している。



図7 2016年調査出土遺物



図8 青銅製鹿形燭台

ここに列挙したすべての出土品と遺構はクシヤン朝最盛期の1～3世紀に年代付けることができる。

DT-32 発掘区の調査は一時中断し、新たにDT-37 発掘区を設けて調査を続けた。

DT-37 発掘区

1967年に開始された都城址の調査では、遺跡の北、西、南および中央で全ての野外調査が実施された。これまで、東側では東城壁の試掘とその上部における墓の発掘が行われただけであった。ここではダルヴェルジン・テパが古代都市として機能していなかった時代の6～7世紀に年代付けられる墓が見つかった。

また、東城壁の半分は、古代都市が3世紀半ばに衰退しはじめ、様々な遊牧民族によって占領された時代に、スルハンダリア川の氾濫で流されたことを指摘しておかなければならない。

さらに、この場所が堅固な都市の防壁の傍にあり、壁を隔ててスルハンダリア川が流れていたため、この地の領主にとっては好都合の場所として選ばれたことを指摘することができよう。このDT-37 発掘区の一画は面積が50×50メートルあり、他の場所よりもやや盛り上がっている。さらにこの丘の廻りを

巡る壁の輪郭が地表面ではっきりと確認できる。そして、ここから西へ80メートルはなれた場所に都市の主たる仏教寺院址DT-25発掘区（第二仏教寺院址）が位置している。

加藤の提案で、2016年にこのDT-37の地を発掘地点に選定し、30日間にわたる調査を実施した。

最初に外側の壁の一部を明らかにし、次に家屋の建築遺構を検出する作業に移行することを決めた。発掘第1日目に、30×30×12センチメートルと29×29×12センチメートルの日干煉瓦から構築された長さ7メートル、幅1メートル、残高1.6メートルの壁を検出した。

今シーズンの発掘は敷地面積の異なる5室の輪郭を明らかにした（図9）。部屋の壁のサイズは標準的規格の34×34×12センチメートルと30×30センチメートルで、6メートルの深さに部屋の床があり、壁の厚さは1.5×2メートルであった。中央の4室は平面形8×8メートルの正方形を呈していた。

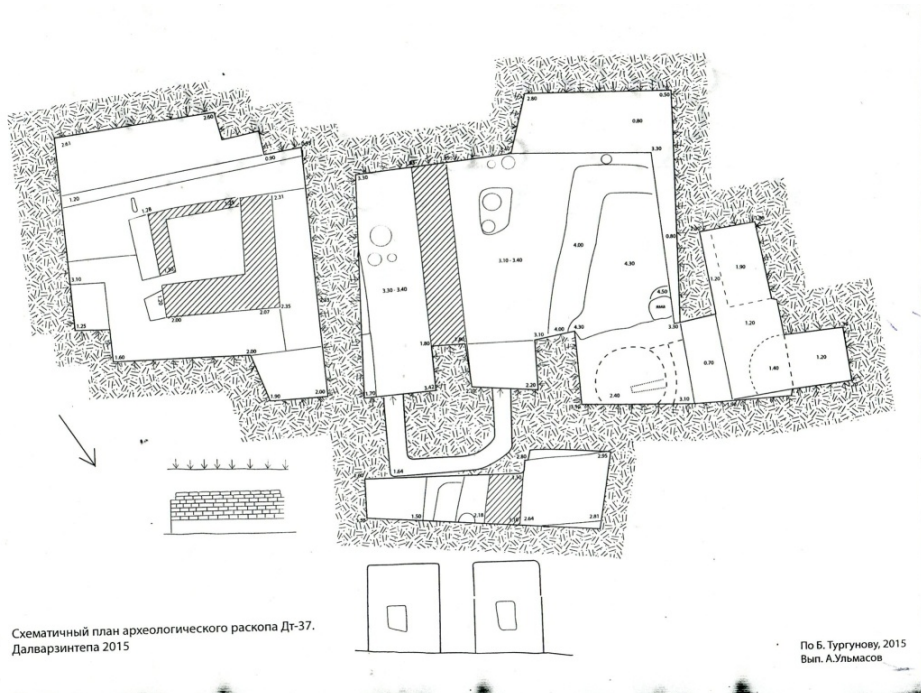


図9 DT-37発掘区平面図

ここでは偶に、深さ2メートルの地点で、ストゥーパ（仏塔）の基壇に似た施設の一部が検出された（図10）。

部屋では非常に豊かで興味深い考古学資料が発見された。それらは、大量の土器、男性像と女性像のテラコッタ12点、完形の脚付き杯、香水用容器、石製円形小皿（図11）である。銅貨50枚以上が出土



図10 DT-37 発掘区 ストゥーパ（仏塔）基壇

したが、その中には支配者像が1点あった（図12a-f）。この銅貨は表に祭壇に手をかざす国王立像が、裏には瘤牛の前に立つ神像が表されている²。まさにこの面に円環が作りつけられていた。

クリーニングをした結果、この銅貨が、クシヤン朝のウェーマ・カドフィセス王（在位110～127年）³に属することが分かった。

² 裏面は瘤牛ナンディンの前に立つ神像（恐らく風神ウェーシヨー）であろう。ウェーシヨーについては、田辺勝美「ウェーシヨー：クシヤン朝のもう一つの風神」『古代オリエント博物館紀要』Vol. XIII, 1992に詳しい。また、本作品の円環付銅貨はペンダント（垂飾）の類で護符として利用された可能性があること、ガンダーラ菩薩像が左肩から右脇腹に着けている聖紐（yajnopavita）に円環のついた垂飾がみられることを田辺博士からご教示いただいた。金貨をペンダントとして用いた例として、Elizabeth Errington and Joe Cribb with Maggie Claringbull (ed.) “The crossroads of Asia. Transformation in image and symbol in the art of ancient Afghanistan and Pakistan”, pp. 19, 146がある。また、エルミターージュのペトロフスキー・コレクションにホータン将来の、カニシユカ金貨28枚を連結した金製腕輪がある（E. Zeimal, Braslety iz Khotana, “Soobsheniya gosudarstvennogo Ermitaja”, LIV, 1990, pp. 34-38。報告者ゼイマリは、金貨はクシヤン朝時代の発行だが、腕輪は後世（18-19世紀）に加工されたものと解釈しているが、クシヤン朝時代の作品の可能性も排除できない。）。これら作品は貨幣裏面ではなく縁に環が付く点で、本作品とは形状が異なる。本作品に外見上類似の作品に、円環付銅製印章の例 Aman Ur Rahman & Harry Falk, *Seals, sealings and tokens from Gandhāra*, Reichert Verlag Wiesbaden 2011, p.39 (01.02.21, 01.02.22), p.187 (TM 07.09.02)があるが、本作品は国王像が凸形に打刻されていて、印として使用した場合、図像が凹になるため、封泥の役目を果たせないと考えられる（田辺博士のご教示による）。ただし、本作品の用途については詳細な研究を必要とするため、今後の研究課題とすべきであろう〔訳者〕。

私たちはこの銅貨が、1960年以來の芸術学調査団によるクシヤン朝遺跡の調査活動の中でも、稀少の出土物であると考えている。



図11 石製円形小皿、「天馬形ケートス」像



図12a DT-37出土 把手付印出土直後（クリーニング前）



図12b DT-37出土ウエーマ・カドフィセス王銅貨表面（国王像）（クリーニング後）



図12c DT-37出土ウエーマ・カドフィセス王銅貨、円環付（クリーニング後）



図12d (左) DT-37出土 ウエーマ・カドフィセス王銅貨、円環付き

(右) 比較資料 ウエーマ・カドフィセス王銅貨 裏面こぶ牛ナンディの前の神像

³ クシヤン朝の歴代王は次の通り。クジュラ・カドフィセス（在位40-90年頃）、ウエーマ・タクトゥー（90-110年頃）、ウエーマ・カドフィセス（110-127年頃）、カニシュカ（127-150年頃）、フヴィシュカ（151-190年頃）、ヴァースデーヴァ（195-225年頃）。



図 12e
（左）DT-37 出土 ウェーム・カドフィセス王銅貨表面（国王像）
（右）比較資料 ウェーム・カドフィセス王銅貨表面（国王像）



図 12f DT-37 出土 ウェーム・カドフィセス王銅貨、円環付き

参考文献

1. Дальверзингепе - кушанский город на юге Узбекистана, Ташкент, 1978 .
2. Пугаченкова Г.А., Тургунов Б.А. Исследования Дальварзингепе в 1972 году. В книге «Древняя Бактрия», Ленинград, 1974.
3. Тургунов Б.Шахматные фигурки из Дальварзин-тепа, Журнал Шахматы в СССР, Москва, 1973.
4. Древности Южного Узбекистана. Каталог на русском, английском, японском языках, Токио, 1991.
(『南ウズベキスタンの遺宝』 創価大学 1991 年)

図版出典

- 図 1 Plan by E. Rtveladze (編集にて一部加工)
図 2 筆者撮影
図 3 筆者撮影
図 4 筆者撮影
図 5 筆者撮影
図 6 Plan by B.Turgunov and A.Ulmasov
図 7 筆者撮影
図 8 筆者撮影
図 9 Plan by B.Turgunov and A.Ulmasov
図 10 筆者撮影
図 11 筆者撮影
図 12 筆者撮影

Summary

New discovery from an ancient city of Dalverzintepa

Kyuzo Kato, Bahodir Turgunov

Various kinds of artifacts were excavated by late Dr. Kyuzo Kato and Bahodir Turgunov of the Japan-Uzbekistan Joint Excavation Team at Dalverzintepa, an ancient city in southern Uzbekistan.

The finds from remains of this city clarified importance of the Buddhism in the Kushan culture.

These new finds are the last contribution to us that Dr. Kyuzo Kato, professor of Soka University brought, who initiated Japanese archaeological research in Central Asia and led archaeological excavations at Dalverzintepa, Karatepa and other sites for many years until his passing away at the age of ninety-four in Termez.